



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学総合博物館ニュース
Author(s)	松枝, 大治; 星野, 祐子
Citation	
Issue Date	2008-12
DOI	
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/49237
Right	
Type	book
Additional Information	
File Information	MuseumNews_18.pdf



Instructions for use



THE HOKKAIDO UNIVERSITY MUSEUM NEWS

北海道大学
総合博物館ニュース

北海道大学総合博物館の可能性はますます膨らんでいます

北海道大学がG8北海道洞爺湖サミットに合わせて設定した“サステナビリティ・ウィーク”の一環として、北海道大学総合博物館では3つの関連行事を行ったことを前号でお知らせしました。本稿ではそれらの事後報告をいたします。3つのうちのひとつ、パンフレットと展示室パネルの英語表記は、和文英訳に時間がかかりましたが、館外の方々のご協力を得て6月半ばに印刷・掲示することが出来ました。特にパンフレットは、サミット後も国外からの来館者によく利用されております。総合博物館はおそらく一番国外からの訪問者の多い学内施設です。今後は全展示パネルの英語表記の実現を目指します。

6月28～29日に開催されたシンポジウム「分類学の帰還“Taxonomy Returns”」は、少々専門的で難しかったので参加者は多くなかったのですが、ターゲットとした分類学者には好評でした(Bull. Zool. Nom. 65(3): 167-168)。私は、9月末にロンドンへ出張した折、訪問した国際動物命名規約委員会事務局(英国立自然史博物館の研究棟の1階にあります)で、そのポスターが壁を飾っているのを見てうれしくなりました。

さて、もうひとつの関連行事である展示「洞爺湖・有珠火山地域の環境と資源」(3階企画展示室:6月17日～8月30日)は、私見ながら“サステナビリティ・ウィーク”中

の白眉だったと思います。G8サミットが開催された洞爺湖は、有珠山の噴火に過去何度も見舞われた地域にあります。そこで起こった火山の噴火という「自然災害」が、住む人間の活動を支える「自然環境」と「資源」にどのように影響したかを統合的に見せることに成功しました。噴火後の水環境の変化に始まり、洞爺湖のプランクトンや魚類、周辺の植生と昆虫、あるいは鳥等々の生物相が噴火に伴う環境変化に影響を受け、その結果として生態系が変化し、その後如何に回復して行ったか、過去に起こった噴火の痕跡がどこにどのように残っているか、そのような環境に住んでいた過去の人々の暮らしぶりはどんなものであったか、そして、現在住んでいる人々は噴火にどのように対処し、どのように避難し、どのように復興を果たして行ったか……。 「噴火」というひとつの出来事を巡って様々な事象が関連し合い、影響し合う様子を、地質学、分類学、生態学、火山学、考古学、社会学……等々の様々な分野の研究が統合された形で俯瞰できる展示でした。

この展示には分野の異なる研究者が多数協力してくれました。展示を作り上げる段階において、互いの研究経過と結果を理解する良い機会となったことでしょう。研究者はそれぞれの専門ごとに「たこつぼ」に入っていると、よく揶揄されます。居心地の良い「つぼ」の中からはたまには外へ出て

外界を知る必要があります。隣を見ることで、自身の研究に新しい展開があるかも知れません。あるいは、境界領域が発見できるかも知れませんし、共同研究が可能となるかも知れません。普段顔も会わせたことのない研究者同士が一つの展示を企画・準備・作成することを通じて、自分の研究の可能性をさらに高めることが出来たのではないのでしょうか。私の考える統合科学 Integrative Scienceの研究・教育のためのプラットフォームとして大学博物館が果たす役割の大きさを垣間見た思いです。

馬渡駿介
(館長/動物分類学)

目次

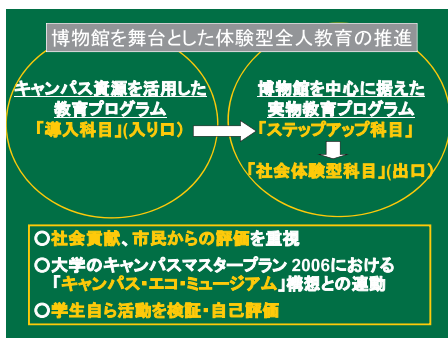
- ページ1: ●北海道大学総合博物館の可能性
- ページ2: ●教育プロジェクト「博物館を舞台とした体験型全人教育の推進」
- ページ2: ●第57～60回企画展示
- ページ6: ●企画展示「北大所蔵アイヌ資料-受けつぎ技術-」
●「北大の蔵書コーナー」新展示物公開
- ページ7: ●特任教員紹介
●国際シンポジウム「分類学の帰還」
●シンポジウム「有珠山と共に生きる」
- ページ8: ●シンポジウム「分子のかたち展」
●バラタクノミスト養成講座
- ページ9: ●バックヤードツアー
●大学院生による「博物館カフェ」
- ページ10: ●ロボットコンテスト「グランパッション」
●北大カフェプロジェクト vol.2
- ページ11: ●楽しい!おいしい!火山教室
●カルチャーナイト2008報告
●チェンパロの小さな演奏会
- ページ12: ●2008年度第1回ボランティア講座&交流会
●コウモリ骨格標本の展示公開
- ページ13: ●セミナー
●シンポジウム・バラタクノミスト養成講座
●主な出来事
- ページ14: ●入館者数 ●お知らせ ●お礼

Dec. 2008
ISSUE 18

『博物館を舞台とした体験型全人教育の推進』 文部科学省の「質の高い大学教育推進プログラム」に採択

標記の教育プロジェクト『博物館を舞台とした体験型全人教育の推進』（事業推進代表：総長、事業推進責任：総合博物館）が、このほど文部科学省の「質の高い大学教育推進プログラム」として採択されました。平成20年度～22年度の3年間の事業予定です。

大学博物館には、1) 学術標本の整理・利活用と 2) 公開展示という二つの重要な教育研究機能があります。これまで北大総合博物館はこの機能を生かし、活発な教育活動を展開してきました。全学教育レベルでは「一般教育演習」2科目、「総合科目」2科目を担当し、さらに学芸員資格取得のための「博物館実習」、大学院共通授業「博物館学特別講義」を開講してきました。年10回以上開講される「パラタクソノミスト養成講座」、月1回以上開催される「土曜市民セミナー」、そしてロボコン・ヒストリカルカフェ等のワークショップ、カルチャーナイトなど、一般市民対象の啓発活動・博物館イベントも積極的に展開してきました。北海道大学の教育研究を分かりやすく紹介する常設展示、年に10回ほど



行われる企画展示により、一般市民が気軽に足を運べる学内施設として年7万人ほどの来館者を迎えるまでに成長しました。

これら活発な大学博物館の活動は140名以上からなる市民・学生ボランティア活動員、50名以上からなる学内外の資料部研究員のサポートにより支えられています。今回の教育プロジェクト採択は、これまで展開してきた総合博物館の教育活動が評価されたこと、博物館教員、学内外のサポーターとともに素直に喜びたいと思います。同時に大学博物館への大きな期待もひしひしと感じます。

さて、今回の教育プロジェクト『博物館を舞台とした体験型全人教育の推進』の内容です。本取組は北大総合博物館を舞台として行われてきた体験型全人教育を全学的に発展させるものです。本学の教育目標「全人教育・実学の重視」を特に意識した教育プログラムでもあります。これまで行われてきた学生教育科目を導入科目、ステップアップ科目、社会体験型科目の3つのステージに位置づけた教育システムを提案しています。フレッシュマン向けの導入科目においては北大エコキャンパスの教育基盤を十分に利活用した実物教育により「一般教育演習」、「総合科目」を充実させます。ステップアップ科目として、博物館の学術標本や展示を利活用し、「パラタクソノミスト養成講座」をより充実させ、地球環境と生物多様性、持続可能な社会

の構築に関する深い知識を持った学生を養成します。このステージでは、学生に博物館リテラシーを身につけさせ、科学コミュニケーション能力の育成にあたります。本プロジェクトの出口にあたる社会体験型科目では、市民対象の大学博物館活動（展示やイベント）の企画・運営に学生が参加します。解説・発表活動において学生達は一般市民や小中高校生からの鋭い質問にさらされる事でしょう。学部学生による一般市民向けの「卒論発表会」や「学部紹介」があってもよいでしょう。このような博物館イベントへの参加を通して、協調性と自主性、自己評価の視点を持った学生を育てます。

特に本教育プログラム全体の出口にあたる社会体験型科目は、これまでの学部教育でも充実が叫ばれていたものです。本プロジェクトをきっかけに、大学博物館における社会体験型科目を高年次における体験教育として全学的に展開できれば、と考えています。

今回の活動が、全国の大学博物館の教育活動に大きな波及効果をもたらすことも期待されます。本教育プロジェクトの遂行にあたっては、他の大学博物館とも積極的な交流を図りながら進めようと考えています。あらためて学内外の関係者のご理解とご支援をお願いする次第です。

高橋英樹
(研究部教授／植物体系学)

第57回企画展示 「ライマンと北海道の地質－北からの日本地質学の夜明け」 (2008/4/29-6/1)

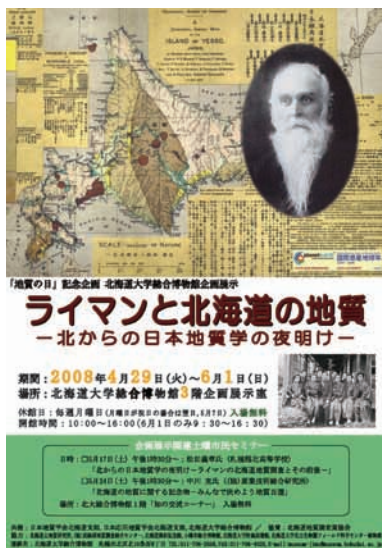
総合博物館企画展示「ライマンと北海道の地質－北からの日本地質学の夜明け」が4月29日(火)から6月1日(日)までの約1ヶ月間、総合博物館3階展示室で開催されました。この展示は今年から始まった「地質の日」(5月10日)を記念したもので、開拓

使御雇い米人地質師山技師ベンジャミン S.ライマンと開拓使仮学校生徒であった彼の弟子たちの活躍や功績および現在における社会と地質学との関わりの紹介を通じて、「地質の日」を広く市民の皆さんに知っていただくことを目的としたものです。

幸い土・日曜日を中心に多くの市民の皆さんにご来場いただき、好評でした。期間中には、関連した土曜市民セミナーを2回(5月17日「北からの日本地質学の夜明け－ライマンの北海道地質調査とその前後－」松田義章<札幌稲北高校>;5月24日「北海

道の地質に関する記念物—みんなで決めよう地質百選」中川 充(独)産業技術総合研究所北海道産学官連携センター)開催しました。また、来場者に、展示内容の感想や意見とともに、「地学」に関する興味と関心などのアンケート調査を実施し、567名から回答を得ることができました。この結果については、今秋行われた日本地質学会第115回学術大会の地学教育・地学史セッションで発表しました。5月8日・15日の朝日新聞朝刊北海道版「北の文化」欄には本展示の主要テーマであるライマンと弟子たちの交流と活躍を紹介する記事を掲載しました。

展示は日本地質学会北海道支部・日本応用地質学会北海道支部・北海道大学総合博物館の共催で行われ、小樽市総合博物館・遠軽町・独立行政法人海洋研究開発機構・釧路コールマイン株式会社・札幌市博物館活動センター・様似町・独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター・壮瞥町・函館市中央図書館・北海道開拓記



ポスター

念館・北海道大学大学文書館・北海道大学附属図書館・北海道大学北方生物圏フィールド科学センター・植物園・社団法人北海道地質調査業協会・北海道立地質研究所の諸機関のほか、多くの個人の方々にもご協力をいただきました。

「地質の日」が5月10日に定められたことには本学が深く関わっています。我が国最初の本格的な広域地質図である「日本蝦夷地質要略之図」(縮尺200万分の1、多色石版刷)がライマンとH.S. マンローおよび札幌農学校の前身である開拓使仮学校生徒であったライマンの13名の日本人弟子たちにより出版されたのは、札幌農学校開校に3ヶ月先立つ1876(明治9)年5月10日でありました。また、国土の地質と地下資源探査の基礎調査を担う組織として内務省地理局地質課(後の通産省地質調査所、現在の独立行政法人産業技術総合研究所地質情報総合センター)が設置されたのは1878年5月10日です。地質課の初代課長は開拓使仮学校初代校長であった荒井郁之助であり、地質調査所が実施した全国20万分の1地質図幅作成事業の最初の成果である「伊豆」図幅はライマンの弟子のひとりにより作成・出版されました。

開拓使は11名ほどの開拓使仮学校生徒を地質測量生徒とし、ライマンは彼らに数学・物理学のほか測量学・製図・地質学・鉱物学の速成教育を行うとともに、春から秋には生徒たちを率いて北海道各地の地質踏査に寝食をとりました。その成果が「日本蝦夷地質要略之図」です。ライマンに指導された若者たちは後にライマンの弟子たちとよばれ、彼らは日本地質学の黎明期において炭田探査・開発などで日本鉱業界をリードしました。



会場風景

展示では、4つのサブテーマ(ライマンと弟子たちの交流と彼らによる石狩炭田の開発:北海道と札幌周辺の地質とその生い立ち:自然災害問題・資源問題・環境問題などの社会と地質学との関わり)に分けて、ポスター展示および北大附属図書館・植物園や他機関に所蔵されている実物・資料などにより展示・解説しました。また、展示室には約5m四方の20万分の1日本シームレス地質図(北海道地域)、展示室前室には2m四方の立体北海道地形図をそれぞれ床に広げ、来場者の興味を集めました。

本展示では、A4判72ページからなる図録「ライマンと北海道の地質」を出版しました。図録は第1部(ライマンと弟子たちの交流と彼らによる調査およびその後の北海道の地質調査と炭田開発)、第2部(4サブテーマからなる展示資料の簡単な解説)、第3部(資料編:江戸末期-明治期における北海道の地質調査および鉱産物調査に関する年表・関連文献集・関連新聞記事)の構成です。14ページからなる口絵(カラー)では、我が国最古の地質図といえるブレークの渡島半島地質踏査図から、明治・大正・昭和および最新の20万分の1数値地質図に至る12枚のカラー地質図によって北海道地質図の変遷を示しました。

在田一則
(資料部研究員/地質学)

第58回企画展示 G8洞爺湖サミット関連企画展示 「洞爺湖・有珠火山地域の環境と資源」(2008/6/17-8/30)

平成20年6月17日から同8月30日までの期間、「洞爺湖・有珠火山地域の環境と資源」展が総合博物館3階企画展示室において開催されました。この展示は、同年7月7-

9日の間に洞爺湖近郊で開催された2008年G8北海道洞爺湖サミットの関連企画展示です。

地球温暖化などの環境問題が深刻にな

っている昨今、従来のように経済的発展のみを追い求めるのではなく、自然環境の保全との両立を目指し、持続可能な社会をいかに作り上げるかが重要となって来ています。

洞爺湖サミット開催地の洞爺湖はおよそ10万年前にできたカルデラ湖で、多様な木々に囲まれ、多くの動植物が生息しています。また、近接する有珠山は過去100年間で4度の噴火活動が観測された活火山で、近年では2000年に噴火しました。

この豊かな自然と資源に恵まれる洞爺湖・有珠火山地域では、過去から様々な人間活動も展開されて来ました。そこに広がる生態系、水、火山、地質などの「自然環境」や、鉱物、エネルギー、食糧などの多様な「資源」がこれまで人間の文化や歴史を培って来ました。その一方で、火山噴火・地震のような「自然災害」や人間活動によって生じた環境汚染などの「公害」等、本地域の多様で変動する自然環境と深く関わりながら人類が共生してきた姿を縮図として展示し、改めて21世紀の人類に課せられた重要課題である「環境と資源問題」をこの展示を通して考え直して見たいというのがこの企画展示の趣旨でした。



オープニングセレモニー(6月17日)では、佐伯 浩総長を始め、本堂武夫理事(サミット関連企画本部実行委員長)や馬渡駿介館長のスピーチに引き続き、テープカット後には各展示担当者によってマスコミ関係者や見学者に対するそれぞれの展示内容の解説が行われ大変好評でした。



ポスター

展示の構成は次のようです:1)プロローグ:洞爺湖・有珠火山地域の自然環境と資源、2)人間活動の展開、3)自然災害と環境汚染、そして復帰、4)避難生活と共生、5)エピローグ:グローバル・メッセージ…環境と資源問題の未来を考える。

ここでは、「洞爺湖・有珠火山地域」を研究の舞台として北大の様々な分野の研究者が、これまで蓄積して来た学際的な研究成果を公表すると共に、本展示を通じて未来に向けたメッセージを發しました。

具体的な展示内容は、本地域における生態系(プランクトン、魚類、鳥類、植物等)や水環境のみならず、地質と地下資源、遺跡、火山、避難生活など多岐にわたるものでしたが、単なるパネル展示に留まらず、地形模型、衛星画像(立体画像を含む)、実物標本や剥製展示、避難生活の再現に加え、顕微鏡の設置、パソコン動画や地震計を用いた体験型の展示も行われ、幅広い年齢層の来館者にも十分楽しんで頂けるものとなりました。



展示風景

本企画展示では、初めての試みとして各展示コーナーにそれぞれのポスターの縮小版コピーを置き、希望者が自由にお持ち帰りできるようにしましたが、いずれのコーナーでも飛ぶような売れ行きで、連日のコピー作成に博物館スタッフから嬉しい悲鳴が上がっていました。今回は展示ガイドブック(3D衛星画像と立体メガネ入り)も印刷刊行しましたが、大変好評で関連市町村等か

らの多数に上る寄贈依頼がありました。このほか、次のような土曜市民セミナー、シンポジウムや低学年層対象の関連イベントも催され、いずれも大変多数の方々に参加されました。

土曜市民セミナー(3回)

7月5日(土) 「温暖化によるヒマラヤ氷河湖の拡大と決壊洪水(GLOF)」 知北和久(理学研究院自然史科学部門・准教授)

7月12日(土) 「洞爺湖及びその周辺の環境と資源の過去・現在・未来」 上田 宏(北方生物圏フィールド科学センター・教授)

7月19日(土) 「有珠火山と後氷期の人類活動」 小杉 康(大学院文学研究科・教授)

シンポジウム

8月2日(土) 「有珠火山と共に生きる」 三松三朗(三松正夫記念館館長)、田鍋敏也(壮瞥町総務課長)、岡田 弘(北大名誉教授)

関連イベント(3回)

6月28日(土)、7月27日(日)、8月6日(水) 「楽しい!おいしい!火山教室」 定池祐季(大学院文学研究科院生)ほか

開催期間中には合計19,814人に上る多数の来館者が見学され、期間を通じて独自に実施したアンケートには、約640枚に達する予想をはるかに上回る多くの回答が寄せられました。今回の企画展示では展示を楽しんで頂くと共に、この展示を通じて改めて「環境と資源」問題を真面目に考えて頂いたことと思います。

文末になりますが、本展示に様々な形でご協力いただきました多くの北大関連研究者・学生を始め、関係市町村、博物館ボランティアの方々から心から感謝の意を表します。

松枝大治

(研究部長・教授/鉱物学・鉱床学)

第59回企画展示 「分子のかたち展—サイエンス×アート」 (2008/7/15-9/28)

2008年夏に総合博物館にて行われた企画展示「分子のかたち展」は、私たち自身はもとより、私たちが日頃意識せずに接

している空気や水などあらゆるものを構成している「分子」に焦点をあてた展示でした。特に、最近ニュースや新聞に出現す

ることが多い分子についての展示を行うことで、今までより少しでも分子のことを知るきっかけとなり、日常生活がより豊かで安心なものになってくれればと企画したものです。

また当企画展示では、多くの人が難しい・

キラリなどのイメージを持ち敬遠する「分子」が主役ということから、分子のかたちが持つ美しさや分子のかたちと関連した機能性などの7つのテーマについてアートの展示を行い、少しでも分子を分かりやすく、親しみやすく展示する試みを行いました。これは分子のかたちに関連したテーマで研究のサイエンティスト7名と、札幌を中心に活躍中のアーティストが、分子のかたちとその不思議、機能との関連性などについて意見交換し、アーティストがそこで得たイメージやインスピレーションを作品にしてもらうものです。最終的にさまざまなジ

ャンルのアーティスト7名がそれぞれの「分子的」作品を出展し、展示物と説明パネルというスタイルの枠を超えたものとなりました。会場には分子の構築原理からデザインしたフレンドリーな分子のサイエンス展示が行われ(展示制作:mano de)、展示期間中に訪れた20,000人を超える来館者の中には、コンセプトに満ちた展示方法に戸惑いながらも楽しむ来館者の姿が見られました。

準備期間があまりなく、関係者の方々には多大なるご迷惑をお掛けしたことをお詫びいたします。またご協力いただいたす



べての方に、この場を借りてお礼申し上げます。有り難うございました。

小俣友輝

(研究部助教/博物館情報科学)

第60回企画展示 「カレル・チャペック展」 (2008/10/25-12/25)



兄ヨゼフとカレル(手前)

「ロボット」という言葉の生みの親として知られるチェコの作家カレル・チャペック(1890-1938)。『ロボット』、『山椒魚戦争』といった文明批判的SF作品や推理小説、『長い長いお医者さんの話』などの児童文学、『園芸家一二月』などのエッセイ、評論、旅行記、新聞コラムなど、多彩な作品で20世紀前半の世界文学を代表する作家として有名です。創作上のパートナーであった兄ヨゼフ(1887-1945)とともに、近年日本でもファンを増やしています。

カレル・チャペックがナチス進攻前夜のプラハで世を去ってから70周年となる今年、チェコ内外で作家を回顧する催しが相次いでいます。10月25日から12月25日まで

の55日間。3階企画展示室にて「カレル・チャペックその生涯と時代1890-1937:没後70周年展」を開催しています。作家の生涯に光をあて、その時代の流れをパネルによって再現しました。また生前の愛用品、本人撮影の写真、兄ヨゼフによる装丁本など約80点も展示されました。展示物はプラハ近郊ストゥシュにあるチャペック記念館監修によるもので、学内外のチェコ研究者が日本語化を担当しました。会場では記念館作成の最新ドキュメンタリー映像も上映しました。

10月24日にはオープニングセレモニーが開かれ、チェコ駐日大使にもご出席戴き盛会なセレモニーとなりました。25日は「カレル・チャペック=シンポジウム」が開かれカレル・チャペックの研究家であられる飯島周(跡見学園女子大学名誉教授・日本チェコ教会会長)、阿部賢一(武蔵大学人文学部准教授)、沼野充義(東京大学大学院人文社会系研究科教授)の先生方に御講

演を戴きました。約100名の参加があり盛会でした。オープニングセレモニーとシンポジウムの前には、チェコの作曲家であるドボルジャークの作品が、靏島頼子さんによりチェンバロで演奏されました。

主催:北海道大学総合博物館、スラブ研究センター、大学院メディア・コミュニケーション研究院。協賛:岩波書店、エルムプロジェクト、筑摩書店、平凡社、成文社、恒文社。企画協力:カレル・チャペック記念館(チェコ)、(株)イデッフ。シンポジウム協力:望月哲男(北海道大学スラブ研究センター)。後援:駐日チェコ共和国大使館、チェコ共和国文化省、チェコ共和国外務省、日本チェコ教会、日本チャペック兄弟協会、北海道新聞社、北海道教育委員会。

展示担当者:林 忠行(スラブ研究センター)、橋本 聡(大学院メディア・コミュニケーション研究院)、大原昌宏(総合博物館)。

大原昌宏

(研究部准教授/昆虫学)



「カレル・チャペック展」入口のパネル

北海道大学アイヌ・先住民研究センター、総合博物館 共催(2009/2/1-3/29)

テエタシンリッ テクルコチ 先人の手あと

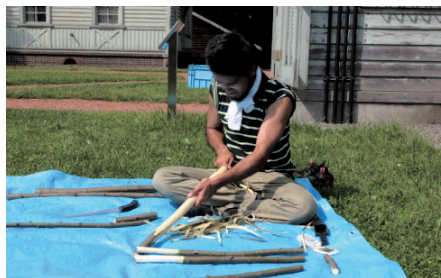
北大所蔵アイヌ資料-受けつぐ技-

来年2-3月、総合博物館では北海道大学アイヌ・先住民研究センターとの共催でアイヌ民族の工芸に関する企画展示を開催します。

北海道大学の所蔵する400万点にもおよぶ標本資料には民族資料も含まれており、なかでも北方圏フィールド科学センター植物園博物館の2500点を超えるアイヌ民族の物質文化資料は、その質の高さにおいて世界的に有数のコレクションであるといえます。2007年度、これらのアイヌ資料

の悉皆調査が終了し、広く活用されるための準備が整いつつあります。いうまでもなく、コレクション・ヒストリーの研究は重要であり、現在も進行しています。

近年、博物館の資料が、工芸家たちの創作活動の情報源として活用される動向が認められます。北大植物園博物館においても、そのような事例が既に現れています。このような動きは、まだ広く認知されていません。本企画展示では、これらの活動の流れを紹介するなかで、北大が所蔵する



資料が持つ現代的意義を示し、今後の活用を促進させることを目的とします。資料の歴史的背景、収集経緯を認識したうえで、博物館のあり方を見つめなおし、そこから今後の可能性を模索することは、これからの大学と先住民族が目指す方向性を示すことになるでしょう。

この展示のために準備会を組織しました。準備会のメンバーは、アイヌ民族の工芸家と大学関係者で構成され、展示のレイアウト、展示資料の選別など準備作業のすべての過程において協同で作業を進めています。展示は、博物館資料とそれらの複製品を展示するとともに、その製作過程を紹介し、現代に生きるアイヌ工芸家の方々の息づかいが感じられるような展示にしたいと考えています。

本企画展と関連して、アイヌ文化の理解促進のために、本企画展に関わっている工芸家たちの作品を総合博物館ミュージアムショップにて12月から販売します。

天野哲也

(研究部教授/考古学)

山崎幸治

(アイヌ・先住民研究センター助教/民族学)

加藤 克

(北方生物圏フィールド科学センター
・植物園博物館助教/博物館史学)

学術テーマ展示 — 北大の蔵書コーナー — 新展示物公開

北海道大学附属図書館は、札幌農学校の設立以来、研究・教育に必要とされる図書を集積し続け、「知の源泉」として歴史を刻んでいます。その歴史を広く一般に公開することを目的に、北海道大学総合博物館は、平成20年7月、附属図書館との共催による「北大の蔵書」コーナーを、2階「学術テーマ展示」の一角に設けました。このコーナーには、附属図書館が所蔵する図書の中から選りすぐりの貴重本を展示し、本学の歴史と独自性を紹介しています。各収蔵本の表紙や紙面に残された「蔵

書印」、あるいは購入者や寄贈者の「書き込み」からは、その書籍が図書館へ所蔵されるに至った経緯、あるいは利用された状況をうかがい知ることができます。

今回の展示の目玉の一つは、札幌農学校初代教頭W・S・クラーク、同第2代教頭W・ホイラーが本学へ寄贈していった図書の実物展示です。重要文化財に指定されている札幌時計台(旧札幌農学校演武場)に用いられているバルーンフレーム構造の解説や、同じく重要文化財である旧札幌農学校模範家畜房(モデルバーン)建

設の際、参考にしたと考えられる図書が含まれています。これら図書には、W・S・クラークのマサチューセッツ農科大学学長時代の‘WILLIAM S. CLARK PRSIDENT MASS. AGR. COLL.’の陽刻、あるいは、W・ホイラー自身の署名などが確認できます。去る7月8日(火)にはW・S・クラークの玄孫Mr. Thomas G. Giese夫妻が来学され、総合博物館を訪問され、「北大の蔵書」コーナーに足を止められました。(北大時報、平成20年9月を参照ください)。

大原昌宏

(研究部准教授/昆虫学)

特任教員・特別研究員・受託研究員の紹介

Sławomir MAZUR

(特任教授 2008/9/22-12/20)



ワルシャワ農業大学のスワボミール・マズール教授は、昆虫綱鞘翅目エンマムシ科の分類研究を専門とされています。2002年にも北海道大学に7ヶ月滞在しており、総合博物館の大原准教授と共同研究を行いました。6年ぶりの来日ですが、前回と同

様に「アジア地域のエンマムシの分類研究」と「世界のヒメナガエンマムシ族のレヴィジョン作成」をテーマに共同研究を続けます。

大原昌宏

(研究部准教授/昆虫学)

国際(公開)シンポジウム 「分類学の帰還」

現在、主に人間のふるまいのせいで生物多様性が世界中で減少しています。減少を食い止めようと、様々な研究が行われています。では、皆さん、地球上の生物はいったいどのくらい多様なのがご存じですか？実は、その答えを誰も知らないのです。どのくらい多様なのがわからずに減少を食い止める研究などできるのでしょうか？というわけで、地球上の生物多様性の減少を云々する前に、生物はどのくらい多様なのかを理解する必要があります。そのためにはまず、それぞれの種に名前を付けて区別することが必須です。この段階なしには生物相互間の関係など研究できるはずありません。それを行うのが分類学なのです。基本科学である

分類学の重要性は、しかし、応用研究の陰に隠れてしまっています。本国際シンポジウムは、そのような現状をふまえ、基本科学である分類学の重要性を皆様に理解していただくことを第一目的に企画されました。

本シンポジウムは、国際動物命名法審議会の会長デニス・ブラザース氏(南アフリカ・クワズルナタル大学・教授)を講演者の一人にお迎えし、総合博物館1階「知の交流」コーナーで2日間にわたって行われました。1日目の6月28日(土)は、生き物の名前に興味をお持ちの一般の方、アマチュア研究者の方、学生、そして専門家、すべての方々を対象とした、生物の学名に関する講演会「生き物に名前を付ける」を日本語で開催しました。まずは国際動物命名法審議会の会長デニス・ブラザースに、生物の命名の仕組みを話していただき(同時通訳付き)、続いて、

3人の研究者に、学名が変更される場合の規約の解釈、提案書Proposalの書き方、そして命名法に関する新しい提唱等々を、実際に基づいて講演していただきました。最後に、つい最近改訂された国際植物命名規約最新版「ウィーン規約」について、その日本語版の翻訳者のお一人に解説していただきました。2日目の29日(日)は、「Toward the Future Development of Zoological Nomenclature」と題して英語による専門家向けワークショップを開催しました。最後のパネルディスカッションは、参加者が15人程と少なかったため、椅子を円形に並べ、いわば車座となってお互いに自由に意見を交換しました。参加者の皆様には有意義な2日間を過ごしていただけたと企画者一同、自負しています。

馬渡駿介

(館長/動物分類学)

2008 G8洞爺湖サミット関連企画展示 「洞爺湖・有珠火山地域の環境と資源」関連 シンポジウム「有珠山と共に生きる」

企画展示「洞爺湖・有珠火山地域の環境と資源」関連シンポジウムが8月2日、総合博物館1階「知の交流コーナー」で開催されました。

有珠山は、日本で最も活発な活火山の一つです。20世紀4回目となった2000年の噴火では、直前予知と事前避難の成功により、犠牲者を出すことなく、終息を迎えることができました。この「成功」の背景には、住民、研究者、行政、マスコミの連携や、地域での防災教育の取り組み等がありました。

そこで、本シンポジウムは、有珠山周辺地域の防災・減災に関わる3名のキーパーソンを講師として迎え、地域住民、行政職員、研究者それぞれの立場から2000年有珠山噴火や、有珠山とのつきあい方についてお話しいただきました。まず、三松三朗氏(三松正夫記念館館長)には、「昭和新山と三松正夫」と題して、昭和新山の生成を観測し、「ミマツダイヤグラム」を残した三松正夫氏の生き方から学ぶ、有珠山とのつきあい方についてお話しいただきました。次に、

行政職員である田鍋敏也氏(壮瞥町総務課長)には、「行政の災害対応と現在の取り組み」と題して、2000年噴火時における行政の災害対応と、現在の防災・減災に関する取り組みについてご紹介いただきました。そして、研究者として2000年噴火時の減災に多大な貢献をされた岡田弘氏(北大名誉教授)には、「2000年有珠山噴火をふりかえる」と題して、自身の災害対応に影響を与えた国内外の出来事を紹介しつつ、2000年噴火について振り返っていただき

ました。

3名の講師に共通していた考え方として、火山の「災害」という側面ばかりでなく、温泉や豊かな自然といった「恵み」に目を向けるということがありました。また、3名とも有珠山という火山に魅せられているからこそ、防災・減災活動やエコミュージアム、そしてジオパーク(世界地質遺産)に熱心に取り組まれているということが伝わってくる講演でした。

講演の後に設けたディスカッションの時

間では、地域住民の生活再建や、G8サミットが地域に与えた影響についてなど、会場から多数の質問が寄せられ、活発な議論が



シンポジウムの3名の講師(左から三松三朗氏、岡田弘氏、田鍋敏也氏)：小池省二氏撮影

展開されました。

定池祐季

(文学研究科人間システム科学専攻)



田鍋氏の講演：小池省二氏撮影

(公開)シンポジウム 「分子のかたち展」

2008年9月20日、総合博物館1階知の交流コーナーにおいて、分子のかたち展関連シンポジウム「サイエンス×アート、出会いのかたち」が行われました。「分子のかたち展」は異なる分野の人々が一つのテーマを中心に集まり、新しい分野の発展や異分野をつなぐ人材の開拓を目指す企画でしたが、展示最終日を一週間後



に控え行われたシンポジウムでは、筆者とコンセプトに賛同した2人の演者による講演とワークショップが行われました。筆者による「サイエンスとアート、出会いのアーカイブとこれから」では、分子のかたち展を行うにいたったきっかけとねらい、展示会の内容に関する紹介がありました。次いで札幌大谷短期大学美術科教授の森田克己さん「自然のかたちと造形デザイン」では、自然界のいたるところに見られる美しいかたちとご研究との関連、また人間が作り出した世界の造型デザインのご紹介、またご自身が目指すアート・デザインと異分野との融合についての展望が示されました。最後にアーティストであり北翔大学講師でもある安藤文絵さんによる「a line project 一心の分子」では、分子のかたちワークショップの一つでテーマとして取り上げられた「光により色を

変える分子」と、ご自身の「a line project」を融合させた、Tシャツを使ったワークショップが行われました。自分の心にある感情の線を一筆書きでTシャツに表し身に付けることで、参加者が自分の中のアートに触れるきっかけとなったワークショップでした。当日参加者は21名、演者を含め参加者にとって、異分野のインタークロスを感じられる大変実りあるシンポジウムでした。

なお、当シンポジウムは形の科学会「形シュレー」との共催で行われました。この場をお借りして、さまざまな面でご助力いただいた東海大学の松浦 執氏、岐阜医療科学大学の高田宗樹氏、北海道工業大学の小川直久氏に心より感謝申し上げます。有り難うございました。

小俣友輝

(研究部助教／博物館情報科学)

パラタクソノミスト養成講座 (2008/7,8,9)

2008年度におけるパラタクソノミストは、19講座が予定されています。7月から9月にかけては、下記の5つの講座が開かれ延べ64名が参加しました。なかでも「土壌ダニ」と「石器」パラタクソノミストは今年度から始まった新しい講座で、非常に好評でした。

植物(7月12日・13日;参加者12名)、魚類(8月4日・5日;4名)、土壌ダニ(9月1-5日;6名)、石器(9月13日;18名)、岩石・鉱物(9月27・28日;24名)。



標本作製を指導する加藤講師(農学院)と受講生たち

大原昌宏

(研究部准教授/昆虫学)



ポスター

バックヤードツアー(博物館探検) Museums as Agents of Social Change and Development — 社会の変化・発展に寄与する博物館 — (ICOM 2008年統一テーマ)

5月18日は国際博物館の日です。博物館を多くの人に親しんでもらい、理解を深めてもらえるよう、この日・その前後の期間、各国でさまざまな博物館活動が展開されます。

北海道大学総合博物館では今年、博物館考古学部門の「裏側」すなわち標本収蔵庫や分析・作業室などの案内をおこないま



した。今回のツアーではテーマを「オホーツク人とはだれか?」と設定しました。

参加者はまず2Fのレファレンスコーナーで自己紹介の後、ツアーの要点の説明を受けました。それからいよいよ見学。3Fでオホーツク人骨の収蔵状態を見学し、2Fオホーツク文化展示コーナーにまわって概要を聞き、さらに展示準備室でカードによる遺物管理システムの解説を受け、石器や骨角器さらには金雲母を含んだアムール産の珍しい土器などを観察しました。最後に共同研究室で活発に質疑をして解散となりました。

20名の参加者たちは、ふだんは立ち入



れない博物館の「裏側」に足をふみいれて、博物の展示は、それが収蔵している資料・標本のごく一部、冰山の一角であり、また地味な研究を積み重ねた成果の一端であることを実感できたようでした。(撮影：配島)

天野哲也

(研究部教授／考古学)

大学院生による 「博物館カフェ」 開設の試み

2008年7月25日と26日、当館に2日間限りの実験的な「博物館カフェ」が開設されました。カフェを企画・運営したのは本学理学院「博物館コミュニケーション特論」ゼミの大学院生達、ゼミを指導したのは当館の天野哲也教授と小侯友輝助教と筆者でした。このゼミでは毎年、社会における大学博物館のあり方について考察し、院生達が当館の課題を見出し、それを解決するためのプロジェクトを企画・運営・評価しています。今年度のゼミのメンバーは、当館に休憩スペースや交流スペースが不十分であることを課題と捉え、「博物館カフェ」を開設するとしたら、どのような機能を持たせるべきか、運営形態はどうすればよいか、場所はどこが望ましいかを、当館の使命や活動の現状と照らし合わせながら考察しました。参考事例の調査も進めながら、6月の大学祭では来館者だけでなくキャンパスを訪れた市民や他大学学生、職員や本学学生など様々な方にカフェへの意見を求めて面接調査を行いました。また、文学研究科の佐々木亨教授にもご協力いただき、いくつかの授業で



博物館カフェ © 大石琢也

学生への質問紙調査を行いました。こうして来館者と非来館者のニーズを分析して考察を進めた結果、博物館の来館者層の拡大と見学の質的向上を目的に据え、博物館の使命のアピール、来館者の知的好奇心の喚起、

休憩スペースの確保、コミュニケーション空間の創出の4点を機能とする「博物館カフェ」像を描きました。理想像を描くだけに終わらせたくないと考えた彼らは、実現への可能性を探るための実験的なカフェ開設の企画

書をまとめ、博物館の会議でプレゼンし、7月25日と26日に実施することが認められました。

カフェの開設場所は1階の知の交流コーナーとしました。展示室でありながら、時にポブラ・チェンバロが演奏されたり、週末にはセミナーが開催される場所であり、窓からはキャンパスの美しい緑が見える開放感のある空間です。院生達は、展示室とカフェが共存する空間づくりを目指しました。収蔵標本を紹介する映像作品を公開し、展示物を活かしながら数種類のテーブルと椅子をレイアウトし、カフェの看板や案内、テーブルに置くポップなどをトータルにデザインしました。また、この時期に開催していた企画展「分子のかたち」

展と関連付けて、カフェの一角に分子模型を置いたり、カップを載せるトレイに分子模型を描いたシートを敷きました。そして、来場者の反応を確認するために質問紙を用意した他、入口にはメッセージボードを設け、カフェの感想を記入いただいて掲示する仕掛けを整えました。飲み物は数種類用意し、運営面での制約から募金制としました。キャンパスを訪れる方々をもてなしたいと活動を続ける北大カフェプロジェクトのメンバーには、様々な面でご協力いただきました。

院生達が運営したカフェには、2日間で約100名の方が訪れました。上述したカフェの4つの機能を果たせる手応えを感じたと同時

に、場所や運営面での課題も明らかになりました。院生達が博物館の会議でカフェの報告をしたところ、費用対効果の観点からデータを蓄積するためにも次回は冬季に開催してはどうかとの提案もいただきました。ゼミは半期で終了しましたが、彼らの取り組みはまだ続く見込みです。授業という枠組みを超えて、大学博物館を活動の場としていきたいという院生達の意欲に応える学生教育を、これからも続けていきたいと考えています。このゼミの半年間の授業報告は、当館のHPの「学生向け教育プログラム」でご覧いただけます。

湯浅万紀子

(研究部准教授／博物館教育学)

ロボットコンテスト 「グランパミッション」を開催 ——工学部と教育学部、博物館のコラボレーション

2008年4月26日、27日と5月3日の3日間、当館でロボットコンテスト「グランパミッション」が開催されました。本誌前号でご紹介した昨年度の「ロボットフィールドプロデュース」と同じく、本学工学部のサークル「ロボットアーキテクト」によるプログラムです。今回は、彼らをご指導する工学研究科の田中孝之准教授からご提案いただき、工学部と博物館だけでなく、教育学部も加わったコラボレーションが実現しました。小学校高学年児童とご父兄12組が挑んだ競技は、ロボットアーキテクトが考案した「グランパ

ミッション」。小中学生を対象とした新しいロボットコンテストの企画・運営力を競う、日本機械学会主催ロボコンプロデュースコンテスト2007で特別賞を受賞したプログラムで、おじいさんに見立てた空き缶をロボットが雪祭り会場まで無事に連れていく時間を競うものでした。

ロボット製作を通してバリアフリーの社会をつくる意味をロボコン参加者に考えていただくことを意図した3日間のプログラムでは、まず、田中孝之先生がロボットの歴史を小説やアニメの世界から紐解き、産業用ロボットの誕生、ロボットの機能や種類、ロボット開発が夢から現実へと進展していく様子を解説なさいました。次に教育学研究院の福岡麻紀さんがバリアフリー社会の実現に向けて必要な視点を物理的な側面と人間の心理的な側面から説明されました。そして、博物館で恐竜や現生動物を研究する理学院の林昭次さんと田中嘉寛さんが参加者を展示室にご案内し、ロボットと生き物の

身体の仕組みを関連付けた解説を行いました。日下聖さんや渋川文哉さんをはじめロボットアーキテクトのメンバー達は前回と同様に、ロボット製作のポイントを明快に説明し、参加者にきめ細やかにアドバイスし、当館のボランティアと共に和やかにプログラムを進行させました。参加下さった皆様から、3日間のプログラムがよく練られていたことにご好評をいただきました。

工学部と教育学部、博物館のコラボレーションによるこの取り組みは、総合大学である北海道大学の総合博物館としての当館の役割を再認識させる機会となりました。この取り組みの意義について、田中孝之先生は本年12月の第9回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会でご発表される予定であり、日下聖さんは日本機械学会ROBOMECH2008で、田中嘉寛さんは第3回博物科学会で発表されたことも、コラボレーションの大事な成果であると考えます。

湯浅万紀子

(研究部准教授／博物館教育学)



グランパミッション2日目の様子

北大カフェプロジェクト vol.2

去る6月7日、総合博物館ウッドデッキにおいて北大カフェプロジェクトによるカフェが設置されました。北大カフェプロジェク

トは北大に学生主体のカフェの常設をめざし、開かれた大学におけるカフェ設置の有益性を検討・実施することを目的として

おり、今年度は「北大おもてなしプロジェクト」として北大元気プロジェクトにも採択されています。博物館におけるカフェ実施は、第59回さっぽろ雪まつりと同時期に行ったものに続き今回で二回目となり、メ

インストリートにたくさんの出店が並ぶ中、総勢100名ほどのお客さんがみえました。

このカフェでは理学院自然史科学専攻「博物館コミュニケーション特論」の院生による面接調査も実施され、博物館の認知度、来館回数、博物館におけるカフェの存在意義や求められること、適正と思うコーヒー

の値段などについての有用な情報が得られました。カフェプロジェクトの学生たちにとっても院生との共同作業という貴重な体験ができ、非常に有意義なカフェとなりました。

小俣友輝

(研究部助教／博物館情報科学)



2008 G8洞爺湖サミット関連企画展示 「洞爺湖・有珠火山地域の環境と資源」関連イベント 「楽しい！おいしい！火山教室」

(2008/6/28、7/27、8/6)

本行事は、身近な素材、特に食材を使った実験で火山現象を説明し、火山に興味を持ってもらうという趣旨で開催しました。実験のメニューは3種類あり、1日に2～3回、3日間にわたって開催しました。

最初の実験では、コーラを使い、マグマの圧力が低下すると火山が噴火するという仕組みを、マグマに見立てたコーラを参加者に振ってもらい、勢いよく吹き出す様子を観察しました。2つ目の実験では、火

山(山体はココア)のマグマ(コンデンスミルク)が下方に抜けると、山頂が崩落してカルデラが生成するという現象を観察しました。最後の実験では、山の斜面(ケーキ)に雨(牛乳)を降らせ、火山灰(ココアパウダー)が積ると、雨が地中に染みこまずに泥流が発生してしまうという現象を観察しました。本来は小学生～中学生を対象とした本企画でありましたが、大人の参加も多く、多くの人に楽しみながら火山につい



火山灰(ココアパウダー)の積もった山の斜面(スポンジケーキ)に雨(牛乳)を降らせて降雨型泥流を発生させている様子
(8月6日の実験より)

て知っていただく機会となりました。

定池祐季

(文学研究科人間システム科学専攻)

カルチャーナイト 2008報告

7月25日、総合博物館と北大科学技術コミュニケーション養成ユニット(CoSTEP)はカルチャーナイト2008に参加し、「チェンバロと星空の夕べ」を共催しました。展示を夜9時まで延長公開してスタッフが展示解説を行った他、当館ボランティアによる

ポプラチェンバロや4Dシアターのオリジナルのプログラム、北大天文同好会によるプラネタリウム上映、市民グループの札幌星仲間による観望会も行いました。チェンバロ体験プログラムでは、子どもから大人まで様々な方にチェンバロに親しく触れていただきました。レクチャー付きコンサートは、蝋燭で部屋を照らす数百年前の演奏会を再現し、本格的な古典楽器の演奏をお楽しみいただきました。4Dシアターのプログ

ラムでは、今年度4月から7月まで4Dボランティアが定期的にミーティングを行い、博物館教員とCoSTEP教員が支援してこの夜のための企画を白紙から作り上げました。総勢70名のスタッフの協働により実現したプログラムは、多くの来場者からご好評をいただきました。

湯浅万紀子

(研究部准教授／博物館教育学)

チェンバロの 小さな演奏会



総合博物館では、2004年に台風で倒れたポプラから作られたポプラチェンバロによる演奏会を行っています。学内外から寄せられた多くの方の温かい気持ちと寄付により制作されたポプラチェンバロは当館に展示され、チェンバロの維持と周辺展示充実に関わるチェンバロボランティアにより管理・運営されています。小さな演奏会はその一環として行われており、演奏前後の楽器調律、演奏により、展示品としての

みでなく楽器としても活用されています。登録ボランティアの中にはリコーダーやバイオリンの奏者もあり、バラエティのある演奏となっています。小さな演奏会は不定期に行われていますが、一日のスケジュールは当館一階・知の交流コーナーに掲示されます。

小俣友輝

(研究部助教／博物館情報科学)

2008年度 第1回ボランティア講座 & 交流会

総合博物館では、約140名のボランティアの方々に標本整理や展示解説など12分野で活動していただいています。ボランティアに登録していただく際には、ボランティア・マネジメント担当の筆者から大学博物館である当館の使命や成り立ち、活動展開、そしてボランティアの役割と位置付



札幌農学校第二農場で

けについてご説明し、各分野の担当教員の指導を受けて活動に従事していただいています。更に、2007年度より年2回、ボランティア活動の意義について確認の意味もこめたガイダンスと、博物館に関連した特定のテーマに関する講義、12分野のボランティアの意見交換から成る「ボランティア講座&交流会」を開催しています。

2008年度第1回は6月1日に開催し、本学工学研究科で建築史を研究されている池上重康助教に札幌農学校第二農場をご案内いただきました。池上先生には当館の資料部研究員を務めていただき、展示企画や博物館実習にもご協力いただいています。第二農場はクラーク博士の大農経営構想の一環として研究と教育が展開

された場所であり、北海道の畜産の発展に寄与してきました。1877年に建てられた日本最古の洋式農業建築であるモデルバーンと穀物庫など、建築学史の面からも価値ある建物群を擁しています。1969年に国の重要文化財に指定され、当館の展示室にも第二農場に関連したコーナーがあります。池上先生には、展示解説でお伝えしたいいくつかのエピソードも伺いました。池上先生と参加したボランティアとの間で、博物館の展示と第二農場を更に関連付ける仕掛けを検討したいなど活発な意見交換が行われました。10グループから18名に参加いただき、日ごろのグループの活動を紹介し合う交流会も和やかに行われました。

湯浅万紀子
(研究部准教授/博物館教育学)

総合博物館のコウモリ骨格標本が 石狩市で展示公開

石狩市の博物館「いしかり砂丘の風資料館」では、8月23日から11月3日にかけて、テーマ展「手／骨にみる動物の生態」を開催しました。このテーマ展では、さまざまな動物の手(前肢)の骨格を展示しており、手の形(つくり)から、骨組みが少しずつ異なったり似てきたりするの各動物の生活を反映している結果であることを理解してもらおうという狙いがあります。

この企画展に、北海道大学総合博物館からは、当館で所蔵している、古いコウモリの骨格標本を貸し出しました。これは農

学部の旧応用動物学教室が所蔵していた標本で、元々農学部で教材として活用されていたものだと思います。詳しい種名

や採集年月日、採集地などの資料情報には不明な点が多いのですが、コウモリ独特の手のつくり(翼の部分の骨格構造)がよくわかる標本です。このため、元当館研究支援推進員で、現在「いしかり砂丘の風資料館」非常勤職員の山本佳奈さんがこの標本による展示効果に着目し、同館の志賀健司学芸員を通じて、出展の要請がありました。企画展では、北海道に見られる各種の哺乳類骨格が展示された他、骨格標本の作り方などが、子どもたちにもわかりやすく解説されていました。

当館では多数の学術標本が収蔵されていますが、展示公開されている標本はごく一部に限られています。これら日頃は目にする事の無い標本も、教育や研究のため活用されています。同時に、いしかり砂丘の風資料館のように、他の博物館での企画展示などを通じて、広く市民の皆様にご覧頂く機会をつくることも博物館の大切な役割です。これからもさまざまな機会を通じて、当館の膨大なコレクションを順

次ご覧いただきたいと考えております。

今回企画展を開催した「いしかり砂丘の風資料館」は、海水浴場と温泉で知られる石狩浜に近い、石狩低地帯の自然史と郷土史をテーマとする博物館です。ぜひ足をお運び下さい。

いしかり砂丘の風資料館

開館時間：9時30分～17時

休館日：毎週火曜日

住所：石狩市弁天町30-4

お問い合わせ：0133-62-3711

詳しくは下記のホームページをご覧ください。

<http://>

www.city.ishikari.hokkaido.jp/museum/

持田 誠
(研究支援推進員/標本・資料管理)



当館から出展したコウモリの骨格標本



いしかり砂丘の風資料館テーマ展
「手／骨にみる動物の生態」ポスター

平成20年4月から平成20年9月までにおこなわれたセミナー

- | | |
|---|---|
| <p>第197回 北大総合博物館土曜市民セミナー
「オホーツク集団の移住と動物獲得—アイトープ分析—」
ジェイムズ テイラー (ワシントン大学人類学科 博士課程院生)
日時:4月12日(土) 13:30-15:00 (参加者約90名)</p> <p>第198回 北大総合博物館土曜市民セミナー
「記憶の中の博物館—博物館体験の長期記憶を探る」
湯浅万紀子 (総合博物館 准教授)
日時:5月10日(土) 13:30-15:00 (参加者約80名)</p> <p>「ライマンと北海道の地質」展 土曜市民セミナー
「北からの日本地質学の夜明け
—ライマンの北海道地質調査とその前後—」
松田義章 (札幌稲北高等学校)
日時:5月17日(土) 13:30-15:00 (参加者約50名)</p> <p>「ライマンと北海道の地質」展 土曜市民セミナー
「北海道の地質に関する記念物
—みんなで決めよう地質百選—」
中川 充 ((株)産業技術総合研究所)
日時:5月24日(土) 13:30-15:00 (参加者約20名)</p> <p>第199回 北大総合博物館土曜市民セミナー
「植物化石から知る植物の歴史」
成田敦史 (札幌第一高等学校 教員)
日時:6月14日(土) 13:30-15:00 (参加者約80名)</p> <p>第200回 北大総合博物館市民セミナー(野外観察会)
「北大エコキャンパス観察会」
高橋英樹・天野哲也 (総合博物館 教授) ・大原昌宏 (総合博物館 准教授)
日時:6月22日(日) 13:30-15:00 (参加者35名)</p> | <p>第201回 G8洞爺湖サミット関連「洞爺湖・有珠火山地域の環境と資源」展 土曜市民セミナー
「温暖化によるヒマラヤ氷河湖の拡大と決壊洪水(GLOF)」
知北和久 (大学院理学研究院 准教授)
日時:7月5日(土) 13:30-15:00 (参加者約40)</p> <p>第202回 G8洞爺湖サミット関連「洞爺湖・有珠火山地域の環境と資源」展 土曜市民セミナー 北大総合博物館土曜市民セミナー
「洞爺湖およびその周辺の環境と資源の過去・現在・未来」
上田 宏 (北方生物圏フィールド科学センター 教授)
日時:7月12日(土) 13:30-15:00 (参加者約50名)</p> <p>第203回 G8洞爺湖サミット関連「洞爺湖・有珠火山地域の環境と資源」展 土曜市民セミナー
「有珠火山と後氷期の人類活動」
小杉 康 (大学院文学研究科 教授)
日時:7月19日(土) 13:30-15:00 (参加者約20名)</p> <p>第204回 北大総合博物館土曜市民セミナー
「分子のかたち展—サイエンス×アート」
小俣友輝 (総合博物館 助教)
日時:8月9日(土) 13:30-15:00 (参加者約60名)</p> <p>第205回 北大総合博物館土曜市民セミナー
「検証!北大の都市伝説」
池上重康 (大学院工学研究科 助教)
日時:9月13日(土) 13:30-15:00 (参加者約80名)</p> |
|---|---|

平成20年4月から平成20年9月までにおこなわれたシンポジウム

- | | |
|---|--|
| <p>第23回 総合博物館国際(公開)シンポジウム
「Taxonomy Returns — 分類学の帰還」
日時:6月28日(土) 13:00-17:00、
29日(日) 10:00-15:00 (担当:馬渡)
(参加者約50名、20名)</p> <p>第24回 総合博物館(公開)シンポジウム
「有珠山と共に生きる」</p> | <p>日時:8月2日(土) 13:30-16:30 (担当:松枝)
(参加者約40名)</p> <p>第25回 総合博物館(公開)シンポジウム
「分子のかたち展—サイエンス×アート—サイエンスとアート、
出会いのかたち」
日時:9月20日(土) 13:30-16:00 (担当:小俣)
(参加者約20名)</p> |
|---|--|

平成20年4月から平成20年9月までにおこなわれたパラタクソノミスト養成講座

- | | |
|---|--|
| <p>7月12日(土)~13日(日)
植物初級パラタクソノミスト講座(初心者・初級) 高橋英樹(総合博物館)
加藤ゆき恵(農学院) 定員:12名 対象:中学生以上・一般(参加者12名)</p> <p>8月4日(月)~5日(火)
魚類パラタクソノミスト講座(初級) 仲谷一宏・矢部 衛(大学院水産科学研究科) 今村 央(総合博物館) 定員:12名 対象:中学生以上(参加者4名)</p> <p>9月1日(月)~5日(金)
土壌ダニパラタクソノミスト講座(初級・中級) 岡部貴美子(森林総合研究</p> | <p>所) 芝 実(松山東雲短期大学) 島野智之(宮城教育大学) 高久 元(北海道教育大学) 定員:12名 対象:大学学部生以上・一般(参加者6名)</p> <p>9月13日(土)
石器パラタクソノミスト講座(初級) 高倉 純(大学院文学研究科) 定員:10名 対象:中学生以上・一般(参加者18名)</p> <p>9月27日(土)~28日(日)
岩石・鉱物パラタクソノミスト講座(初級) 在田一則(総合博物館) 三浦裕行(大学院理学研究院) 定員:10名 対象:小学生以上・一般(参加者24名)</p> |
|---|--|

平成20年4月から平成20年9月までの主な出来事

- | | |
|--|--|
| <p>4月 企画展示「ボタニカル・アート展」3/4-4/13</p> <p>4月 1日 第34回山口県少年少女の船御一行(130名)</p> <p>4月 29日 企画展示「ライマンと北海道の地質—北からの日本地質学の夜明け」4/29-6/1</p> <p>5月 18日 総合博物館バックヤードツアー(博物館探検)開催</p> | <p>5月 22日 文部科学省財務企画担当御一行(3名)解説</p> <p>5月 29日 サハリン州行政府国際対外経済関係地域間交流委員会御一行(3名)解説</p> <p>6月 17日 企画展示「洞爺湖・有珠火山地域の環境と資源」6/17-8/30</p> |
|--|--|

6月 19日 文部科学省研究振興局研究環境産業連携課御一行(2名)解説
 6月 22日 北大エコキャンパス観察会開催
 6月 28日 総合博物館国際(公開)シンポジウム「Taxonomy Returns - 分類学の帰還」6/28-29
 6月 28日 企画展示関連イベント「おいしい!楽しい!火山教室」第1回
 7月 1日 G8サミットエクスカーション(7名)解説
 7月 1日 タスマニア大学学長御一行(3名)解説
 7月 5日 総合博物館2階「学術テーマ展示-北大の蔵書」新展示物公開
 7月 8日 クラーク博士玄孫 Mr. Thomas G. Giese 夫妻来館
 7月 15日 企画展示「分子のかたち展-サイエンス×アート」7/15-9/18
 7月 15日 韓国東西大学設立者 総長御一行(20名)解説
 7月 27日 企画展示関連イベント「おいしい!楽しい!火山教室」第2

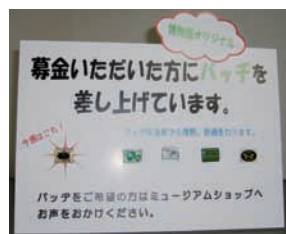
回
 8月 1日 平成20年度 国立大学法人等幹事協議会北海道支部御一行(29名)解説
 8月 2日 総合博物館(公開)シンポジウム「有珠山と共に生きる」
 8月 6日 企画展示関連イベント「おいしい!楽しい!火山教室」第3回
 8月 8日 日韓歴史共同研究委員会第3分科会御一行(14名)解説
 9月 20日 総合博物館(公開)シンポジウム「分子のかたち展 サイエンス×アート」
 9月 24日 特任教授 Sławomir MAZUR 博士着任(ポーランドSGGW)9/24-12/20
 9月 25日 中央大学入試センター事務部大学史編纂課御一行(2名)解説
 9月 26日 国立大学薬学部事務長会議御一行(20名)解説

入館者数(平成19年10月~平成20年3月)

	入館者数	見学団体数	解説の件数	企画展示(略称)
4月	4,339	8	3	ボタニカル・アート展 ライマンと北海道の地質
5月	5,581	17	7	ライマンと北海道の地質
6月	6,398	37	11	ライマンと北海道の地質 洞爺湖・有珠火山地域の環境と資源
7月	6,250	26	13	洞爺湖・有珠火山地域の環境と資源 分子のかたち展
8月	10,395	23	9	洞爺湖・有珠火山地域の環境と資源 分子のかたち展
9月	6,014	18	6	分子のかたち展

お知らせ

- パラタクソノミスト養成講座は、昨年度まで「21世紀COEプログラム新・自然史科学創成」により5年に渡って開催されてきた事業ですが、今年度から総合博物館の主催事業になりました。来年3月までの間に、合計で19講座が開催される予定です。3月までに開催される講座は以下のとおりです。往復ハガキで総合博物館事務室までお申し込み下さい。詳細はポスター、ホームページをご覧ください。
- コケ植物パラタクソノミスト講座(初級) 講師:内田暁友(斜里町立知床博物館) 1月10日(土)
- 昆虫パラタクソノミスト講座(初級) 講師:大原昌宏(北大総合博物館)・澤田義弘(大阪府箕面公園昆虫館) 1月24・25日(土・日)
- 鉱物パラタクソノミスト講座(上級) 講師:三浦裕行(北大理学研究院) 2月7日(土)
- イネ科植物パラタクソノミスト講座(中級) 講師:木場英久(桜美林大学) 2月8日(日)
- 甲虫目昆虫パラタクソノミスト講座(中級) 講師:大原昌宏(北大総合博物館)・澤田義弘(大阪府箕面公園昆虫館) 2月14・15日(土・日)
- 水草パラタクソノミスト講座(初級) 講師:山崎真実(札幌市博物館活動センター) 2月21日(土)
- 鉱床パラタクソノミスト講座(上級) 講師:高橋亮平(九州大学工学研究院)・松枝大治(北大総合博物館) 2月21・22日(土・日)
- 岩石・鉱物パラタクソノミスト講座(初級) 講師:在田一則(北大総合博物館)・三浦裕行(北大理学研究院) 2月28日(土)・3月1日(日)
- 企画展示「南極写真展『剥き出しの地球-南極大陸』」が平成20年10月28日(火)から11月12日(水)までの予定で開催されました。
- 企画展示「歴史的建造物の動的保存と環境のアプローチ」が平成20年11月14日(金)から11月30日(日)まで開催されました。
- 「カレル・チャペック」展開催に合わせてオリジナルバッジを作成しました。募金をされた方にはミュージアムショップで差し上げています。



お礼

以下の方々に、学術標本作製・企画展示準備等で協力いただきました。謹んでお礼申し上げます(平成20年4月~平成20年9月)。

植物標本: 青野恵実、奥本陽子、桂田泰恵、金上由紀、神村泰恵、北道米雄、久保拓士、久保田歩、黒田シヅ、甲山幸子、笹森明子、庄山紀久子、鈴木順子、須田 節、高橋友美、高橋美智子、徳原和子、永山和樹、永山修、古田暁彦、星野フサ、三浦美恵子、与那覇トモ子、渡辺隆司

菌類標本: 笹森明子、鈴木順子、田中由香、三浦美恵子

昆虫標本: 青山慎一、稲荷尚記、梅田邦子、大矢朗子、喜多尾利枝子、櫛引靖子、久万田敏夫、永山 修、宮 敏雄、宮本昌子、山本ひとみ

考古学系: 木下真裕美、木村麻衣子、齋藤美智子、比留間俊文

地 学: 岡田美佐子、生越昭裕、神村泰恵、佐藤和子、甲山幸子、堺 俊樹、嶋野月江、寺西辰郎、鳥本准司、福地伸章、三浦貴生、安田 正、山崎敬晴

情 報: 石上隆達、大石琢也、村上英樹

化 石: 相原大介、石橋七朗、尾上洋子、菊地香織、田中嘉寛、寺西辰郎、中野 系、松本貴子、安田 正、八巻千晶

北大の歴史展示: 寺西辰郎

展示解説: 在田一則、石田祐也、石川満寿夫、石橋七朗、河本恵子、児玉 諭、齋藤美智子、清水良平、田中嘉寛、寺西辰郎、中野 系、西川笙子、沼崎麻子、沼田勇美、林昭次、村井容子、持田 誠

平成遠友夜学校: 安東志麻、安藤亮太、石田多香子、大野円実、齋藤美智子、竹内ひかる、田中敏夫、沼田勇美、見山智宣、村井容子、横田麦穂

4Dシアター: 荻田雄輔、久保拓士、小松麻美、佐藤祐介、長水しのぶ、柳田拓人

チェンバロアカデミー: 安達真由美、北川高之、小坂佳子、久住千佳子、佐藤浩輔、佐藤万記子、清水聡子、高橋友子、新妻美紀、藤井健吉、水永牧子、村上英樹

ロボットコンテスト「グランパミッション」(平成20年4月26日、27日、5月3日): 児玉 諭、齋藤美智子、嶋野月江、田中嘉寛、林 昭次

カルチャーナイト(平成20年7月25日): 石田多香子、荻田雄輔、北川高之、久保拓士、小坂佳子、児玉 諭、小松麻美、佐藤万記子、佐藤祐介、嶋野月江、清水聡子、高橋友美、寺西辰郎、長水しのぶ、永山 修、村上英樹、柳田拓人、札幌星仲間、北大天文同好会

(敬称略)

北海道大学総合博物館ニュース 第18号

北海道大学総合博物館ニュース
 編集:松枝大治・星野祐子
 発行日:2008年(平成20年)12月
 発行者:馬渡駿介
 発行所:北海道大学総合博物館
 住所:060-0810 札幌市北区北10条西8丁目
 電話:011-706-2658・FAX:011-706-4029
 E-mail:museum-jimu@museum.hokudai.ac.jp
 http://www.museum.hokudai.ac.jp/
 印刷:柏楊印刷株式会社